アヒルの旅

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アヒルの旅

【Nコード】

N8774H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

アヒルのクワちゃんは小さいけれどとても好奇心旺盛、それで朝早く起きてみてお家の周りを探検しようとしてみると、童話調の小さな冒険です。

第一章

アヒルの旅

アヒルのクワちゃんはとても元気な子です。今日もお父さんとお母さんの周りで元気に歩き回っています。

「ねえパパ、ママ」

「んっ、何だい？」

「どうしたの？クワちゃん」

「僕今このお家にいるよね」

クワちゃんの一家はあるお百姓さんのお家に飼われています。所謂ペットでいつも優しい牛さんや豚さんに囲まれています。犬のおじさんや猫のおばさん達は少し怖いですがけれど襲ったりはしません。

「このお家に」

「うん、そうだよ」

「それがどうかしたの？」

「このお家ってどうなってるの？」

素朴な質問をしました。

「とても広いお家だけれど」

「さて、どうなってるのかな」

「お母さんもよく知らないわ」

この質問にはお父さんもお母さんも首を傾げてしまいました。お父さんもお母さんも今自分達がいるお池のあたりからあまり出たこととは無いのです。

「随分と広いお家だけれどね」

「どうなってるのかしら」

「パパもママも知らないんだ」

クワちゃんはそれを聞いて少し残念に思いました。

「パパとママなら知ってるって思ったのに」

「仕方ないさ。パパ達の小屋はここにあるんだから」

「お池もね」

アヒルの一家の小屋はお池の傍にあります。他には鶏さん達の小屋もあります。アヒルの一家と鶏さん達は卵を産む為にもお家で飼われているのです。

「ここにいれば御飯も貰えるし」

「それでいいんじゃないかしら」

「それはそうかな」

クワちゃんはお父さんとお母さんに言われてまずは納得しました。

「そんなものかな」

「そうだよ。じゃあクワちゃん」

「御飯。食べなさい」

そうして御飯を食べるように言われました。クワちゃんはその言葉には素直に頷きます。けれどどうしても思うのでした。お家はどくなっているのか。考えだすともういてもたつてもいられないのがクワちゃんでした。とても好奇心旺盛なアヒルだったからです。

それで次の日お父さんとお母さんがまだ寝ている間にこっそりとお家を出て。それでお家がどうなっているのか見てみることにしました。まずは鶏さん達がいる場所に向かいました。

鶏さん達はすぐそこで集まって寝ています。まだ朝が早くて皆寝ています。クワちゃんはそこを通ります。すると鶏の中で一番年上のお爺さんが起き上がって。

「あれ、クワちゃんじゃないか」

「お爺さん、おはようございます」

「また今日は随分と早いね」

お爺さんはその翼で目をこすりながらクワちゃんに言いました。

「まずはおはよう。けれどまだ鳴かないよ」

「どうしてですか？」

「だってまだその時間じゃないから」

だから鳴かないというのでした。

「まだね。やっと朝になつたけれどね」
「そうですか」
「そうだよ。それはそうとクワちゃん」
「あらためてクワちゃんに声をかけてきました。」
「今日はまたどうしたんだい？」
「どうしたつて？」
「随分早いじゃないか」
クワちゃんにこのことを尋ねるのでした。
「いつもはお寝坊さんなのに」
「僕、決めたんです」
クワちゃんはこう鶏のお爺さんに答えました。
「このお家の中を見てみようつて」
「へえ、このお家をね」
「このお家つてかなり広いですよね」
「今度はこのことをお爺さんに尋ねました。」
「とても。広いですよね」
「そうだね。広いね」
お爺さんは少し考える顔をしてからクワちゃんに答えました。
「畑もあれば牧場もあるしね。広いよ」
「畑つて？」
「畑にはお野菜があるんだよ」
「まずは畑のことをお話するのですた。」
「それで牧場には牛さんや豚さん達がいてね」
「牛さんや豚さんつてお家の中にいるんじゃないんですか？」
「お昼は違うよ。牧場にいるんだよ」
「このこともクワちゃんに教えてあげるのでした。」
「そこにね。いるんだよ」
「そうだったんですか」
「そうだね。まず畑に行けばね」
「はい、畑ですか」

「まあ。緑の葉っぱが一杯生えているからすぐにわかるよ」
畑がどんな場所なのかも教えてあげるお爺さんでした。

第二章

「そこに行けば今だったら猫がいるね」

「猫のおばさんですね」

「そうだよ。あの猫はわし等には意地悪はするけれど食べたりはしないから」

「えっ、僕達を食べるんですか？」

「そういう猫もいるんだよ」

怖がる素振りを見せたクワちゃんにこのことも教えるのでした。

「怖い猫がね」

「けれどあのおばさんは」

「あの猫は普段から餌を貰ってるからね。それはしないよ」
「けれどこう言って安心させるのでした。」

「大丈夫だよ。本当にね」

「そうですか」

「まあ畑に行つて御覧」

また勧めるお爺さんでした。

「あの猫とも話してみるといいよ」

「わかりました」

クワちゃんはお爺さんの言葉に素直に頷くのでした。

「それじゃあ今から行きます」

「ちよつと遠いから気をつけてな」

注意しておくのも忘れないお爺さんでした。

「それはわかったね」

「はい、それもわかりました」

この言葉にも素直に頷くクワちゃんでした。

「それじゃあ」

こうしてクワちゃんは畑に向かいました。畑までの道はかなり遠いものでした。クワちゃんはずっと一人で歩いていますが左に木の

小屋が幾つも見えます。そのうちの一つから少し歳を取ったコリーが出て来てそれでクワちゃんに声をかけるのでした。

「おや、君は確か」

「はい、アヒルです」

クワちゃんはそのコリーににこりと笑って挨拶をしました。

「犬のおじさんですよね」

「うん、そうだよ」

コリーのおじさんは穏やかな笑みを浮かべてクワちゃんに答えました。

「おはよう」

「はい、おはようございます」

クワちゃんはおじさんに元気よく挨拶を返しました。

「うん。確か」

おじさんはクワちゃんの顔を見ながら考える顔になりました。そうしてそのうえでまたクワちゃんに対して声をかけてきたのでした。

「アヒルのクワちゃんだったかな」

「はい、そうです」

クワちゃんはまたおじさんに言葉を返しました。

「僕のこと覚えてくれてるんですね」

「まあ僕の仕事はあれだからね」

おじさんはクワちゃんの傍に来て言うてきました。

「この家の皆を守ることが仕事だからね」

「それがおじさんのお仕事なんですよ」

「そうさ。それがこの家の犬の仕事なんだよ」

こうクワちゃんに教えてあげるのでした。

「だからなんだよ」

「そうなんですか。凄いですね」

「ははは、仕事だから当然だよ」

おじさんはそれを当然だというのでした。

「そんなことはね。例えばクワちゃん達アヒルの仕事はね」

「僕達のお仕事は？」

「あれじゃないか。卵を産むことじゃないか」
「それだというのでした。」

「鶏さん達と一緒にね。それが仕事だろう？」

「それが僕達の仕事ですか」

「わし等犬は家の皆を守る」

またこのことを話すおじさんでした。

「それをしないと何にもならないんだよ」

「じゃあ僕も卵を産まないといけないんですか？」

クワちゃんはおじさんの言葉を聞いてこう考えはじめました。

「やっぱり。お母さんみたいに」

「ははは、クワちゃんは男だから卵は産めないよ」

おじさんはそれは笑って否定するのです。

「男はね。子供を産めないんだよ」

「じゃあ僕の仕事は一体」

何なのかな、と思ったところで。おじさんはクワちゃんに答えてあげました。

第三章

「卵を産んでもらうようにするのがクワちゃんのこれからの仕事だよ」

「それが僕のお仕事なんですか」

「そうだよ。だからクワちゃんはそれをすればいいんだ」

またこう話すのでした。

「それをね」

「わかりました。それじゃあ」

「うん。それでね」

おじさんはここで話を変えてきました。クワちゃんを見ながら。

「クワちゃんはこれから何処に行くんだい？」

「何処にですか」

「ここからお池はかなり離れているけれど」

もうかなり歩いていきます。クワちゃんはひたすらてくてくと歩いています。まだ小さいクワちゃんにとってはかなりの距離を歩いているのです。

「何処に行くのかな」

「畑です」

鶏のお爺さんに勧められたことをそのまま話しました。

「これから畑に行きます」

「そうかい、畑にかい」

「畑は何処ですか？」

道も尋ねるのでした。

「今まで行ったことがないんでよくわからないんですけど」

「ああ、畑ならこつちだよ」

右の前足で右手を指し示して教えるのでした。

「こつちに。ほら、あそこに青い大きな葉っぱが一杯見えるだろ」

「はい」

「あれが畑なんだよ」

穏やかな声でクワちゃんに教えてあげるのでした。

「あそこには猫がいるけれどね」

「それは聞いています」

「少し意地悪なところはあるけれどね」

おじさんはこうお話しながら少し苦笑いを浮かべていました。どうやらおじさんもその猫とは何かとあるようです。それで苦笑いを浮かべるのでした。

「それでも行きたいのなら行くといいよ」

「はい」

「意地悪だけれどクワちゃん達を食べるようなことはしないからね」
こう言って安心させました。

「だから安心していいよ」

「僕を食べるんですか？」

この言葉には少し怖くなるクワちゃんでした。

「まさか」

「まあそれを言ったら僕も同じだけれどね」

おじさんは自分のことも言うのでした。

「肉。食べるから」

「お肉をですか」

「けれど僕もあの猫もクワちゃんを食べたりはしないよ」

それは保障するのです。強い言葉で。

「絶対にね」

「絶対にですか」

「だってクワちゃんはこのお家にいるからね」

だからだということです。

「家族だからね」

「家族ですか」

「そうさ。御主人様も奥様も坊ちゃんもお嬢様達も」

まずは人間のことを言いますがクワちゃんにはまだあまり馴染み

のない人達でした。時々男の子や女の子達が池にやって来て一緒に遊ぶことはありますが。

「それに牛さんや豚さん達も」

「牛さんや豚さん達も家族なんですね」

「当然クワちゃん達や鶏さん達もだよ」

クワちゃん達もだというのでした。おじさんは舌をへっへっ、と出しながら楽しそうな笑顔でクワちゃんに対して話すのでした。

「あとはあまり好きになれないけれど猫達もね」

「猫さん達も」

「皆家族なんだよ」

またこうクワちゃんにお話するのです。

「皆ね」

「家族ですか」

「まさか家族を食べたりなんかしないよね」

「そんなの絶対ないですよ」

クワちゃんにとって食べるものはいつも木の実や稗や粟です。そういったものしか食べないので家族を食べるなんてとても思いも寄らないものでした。

それで首を傾げさえしているのですが。おじさんはさらに言っていました。

「だから僕もあの猫もクワちゃんは絶対に食べないよ」

「絶対にですか」

「そう、絶対にね」

とにかく強い言葉でした。

「だから安心してね」

「わかりました」

「さて、もう着いたね」

お話をしているうちにでした。おじさんと一緒に歩いているクワちゃんは畑に着きました。黒い土の中に緑の葉っぱが一杯あります。

第四章

「さあ、僕はこれだね」

「帰るんですか？」

「うん。家族の皆に何かあるといけないからね
だからだということです。」

「だからこれからパトロールをするから」

「パトロールですか」

「家族を守る為にね。それじゃあ」

「はい、頑張つて下さい」

こう別れの挨拶をしてそのうえでおじさんと別れました。そうして畑に近付くと。その畑の中からかん高い声が聞こえてきたのでした。

「おや、クワちゃんじゃないかい？」

「はい。そうですけれど」

「おやおや」

そのかん高い声はまずは楽しそうに話してきました。

「こんなところまでどうしたんだい？」

「ちよっとお家がどんなのか見て回って回っています」

クワちゃんはここでも真面目に答えるのでした。

「それでこの畑にも」

「そうだったのかい」

声はクワちゃんその言葉を聞いて楽しそうな色を含ませてきました。

「それはいいことだね」

「いいことですか」

「そうだよ。何でも知るのはいいことだよ」

そしてクワちゃんに「こうも言うのでした。」

「何でもね」

「はあ」

「さて、と」

声の調子が少しばかり変わりました。

「挨拶はしないとね。おはようクワちゃん」

「おはようございます」

挨拶と共に畑から出て来たのは一匹の黒猫でした。猫のおばさんでした。

「また随分と遠くに来たねえ」

「そうですね？」

クワちゃんは自分ではそれがよくわかっていないようでした。

「何かすぐに着いたように思っんですけれど」

「いや、そうでもないよ」

けれどおばさんはそうではないというのです。

「結構以上にね。お池から距離あるから」

「そうですね？」

「そこから歩いてきたって凄いですよ」

畑から出て来て身体を伸ばしながらクワちゃんに対して言いました。

「そんな小さな身体でねえ」

「はあ」

「それにしてもよくあたしがここにいてわかったね」

おばさんは今度はこのことをクワちゃんに尋ねてきました。

「どうしてわかったんだい？」

「鶏のお爺さんと犬のおじさんに教えてもらいました」

クワちゃんはやっぱり正直でした。

「それです」

「ふうん、あの爺さんと頑固者にねえ」

「頑固者って？」

クワちゃんには少しわからないことでした。誰が頑固者なのかわかりかねました。

「それって誰のことですか？」

「あの犬の親父のことだよ」

身体を伸ばし終えてからまた言うおばさんでした。

「融通が効かないからねえ」

「融通、ですか」

「ああ、そのうちわかるからいいよ」

クワちゃんにはまだ難しい話だと思ってこれ以上は話さないの
でした。

「それよりもね」

「はい」

「ここに来たらいいものが食べられるよ」

おばさんはにこりと笑ってクワちゃんに言うのでした。

「あたしは虫を食べるのが好きだけれどね」

「虫ですか」

「あんたも食べるといいよ」

クワちゃんにもその虫を食べることを勧めてきました。

「虫をね。食べてみたらどうだい？」

「虫ですか」

クワちゃんは虫を食べると聞いてその丸い目をさらに丸くさせま
した。

「虫って食べられるんですか」

「あれっ、知らないのかい」

おばさんはクワちゃんが虫は食べられるということを知らないの
を聞いて意外といった顔になりました。これは思いも寄らないこと
だったのです。

「アヒルなのに」

「僕虫食べたことないですよ」

クワちゃんはこのこともおばさんにお話しました。

「いつも稗とか粟とかで」

「そんなもの食べて美味しいのかい？」

「美味しいですよ」

クワちゃんはにこりと笑っておばさんに答えました。

「とても」

「そうなのかい」

おばさんはそういったものが美味しいと聞いて首を傾げさせました。

「稗に粟ねえ」

「それよりも虫って美味しいんですか？」

クワちゃんは逆におばさんに問い返しました。

第五章

「何か動いて気持ち悪いんですけど」

「これが美味しいんだよ」

おばさんは舌なめずりしながらクワちゃんに答えました。

「もうね。魚や御主人様達がくれる餌も美味しいけれどね」

「虫もなんですか」

「そうだよ。けれどアヒルだったら虫食べると思っただけけどね」

「僕食べたことないです」

クワちゃんはあくまでこう正直に話します。

「パパもママも」

「まあ食べないんだっいたらいいよ」

おばさんはそれはそれでいいというのでした。

「それでも気が向いたらね」

「食べてみるのもですか」

「いいものだよ」

穏やかに勧めるのでした。

「美味しくて栄養があつてね」

「はあ」

「そういうことだね。あたしが言うのはそれだけだよ」

話を一旦切るおばさんでした。

「虫についてはね」

「そうですね」

「それでクワちゃん」

そのうえでまた別の話をクワちゃんにしてみました。

「あんたこれからどうするつもりだい？」

「どうするって？」

「だから。あんたの小屋に帰るのかい？それとも他にも何処かに行くのかい？」

このことをクワちゃんに尋ねるのですた。

「どうするんだい？これから」

「牧場に行きたいです」

クワちゃんはおばさんの質問に答えました。

「牛さんや豚さんがいる牧場に」

「ああ、それは丁度いいね」

おばさんはクワちゃんのその言葉を聞いて満足した顔で頷きました。

「丁度いいよ。それはね」

「丁度いいって？」

「ほら、後ろを見て御覧」

自分の右の前足で前を、クワちゃんにとっては後ろを指し示しました。丁度そこが牧場なのです。

「後ろをね」

「はい」

「ほら、あそこだよ」

その後ろを振り向いたクワちゃんにまた告げました。

「あそこは草原が一杯開けてるよね」

「ええ」

振り向いたクワちゃんが見たのは本当にそうでした。緑の絨毯が木の柵に覆われてそこにありました。けれどそこにはまだ誰もいません。

「あそこが牧場なんだよ」

「あそこがですか」

「もうすぐそこだよね」

おばさんは優しい声で言ってきました。

「そろそろ牛や豚の皆が出て来るし」

「牛さんや豚さんも」

「それに坊ちゃんも馬に乗ってやって来るね」

おばさんはこうも言い加えました。

「馬の旦那にね」

「お馬さんも来るんですか？」

クワちゃんもお馬さんのことは見ていましたし会ったこともあり
ます。このお家の坊ちゃんが馬に乗ってお池のところに来ることが
あるからです。とても大きくて真面目で立派なお馬さんです。

「あのお馬さんも」

「そうよ。さあ、今から行くとね」

「はい」

「丁度出て来る時に遭うから」

「お馬さんが出て来る時にですか？」

クワちゃんはそのお馬さんのことだと思いました。けれどそれは
違いました。

「これから」

「ああ、お馬さんだけじゃないよ」

おばさんはこうクワちゃんに教えてあげました。

「牛さんや豚さんもね」

「出て来るんですね」

「そうだよ。これが本当に賑やかだね」

楽しそうにクワちゃんに話しています。

「一度見てみるといいよ」

「わかりました。それじゃあ」

「ああ、ただしね」

おばさんはここでクワちゃんに一言言い加えてくれました。

第六章

「柵の上から見るんだよ」

「柵の上から？」

「そう、柵の上からね」

見るように話すのでした。

「見た方がいいよ」

「どうしてなんですか？」

「危ないからね」

だからだと。クワちゃんに教えてあげるのでした。

「草のところにはいたらね」

「危ないんですか」

「お馬さんにしる牛さんにしる大きいよね」

「はい」

これはクワちゃんにもよくわかることでした。アヒルの、しかもまだ子供のクワちゃんから見てお馬さんも牛さんも豚さんもとても大きいです。それこそ仰ぎ見る位です。

「だからね。踏まれたら危ないから」

「だからなんですか」

「そうよ。だから柵の上から見る方がいいよ」

そしてまたクワちゃんに教えてあげたのでした。

「わかったね」

「わかりました」

クワちゃんはここでも素直に頷きました。

「それじゃあ柵の上から」

「柵の上には昇れるかしら」

「はい、あれ位だったら」

クワちゃんは今度は柵を見ながらおばさんに答えました。

「いけます」

「わかったわ。それじゃあね」

「おばさん、有り難うございました」

クワちゃんはおばさんに向かいなおして深々と頭を下げました。

「それじゃあ今から行って来ます」

「うん。それじゃあね」

こうしてクワちゃんは猫のおばさんと別れてそのうえで牧場の柵の上によじ登りました。思ったよりも素早く動いてそのうえで辿り着いたのでした。

「さて、と」

クワちゃんはその柵の上で待っていました。すると暫くして。牧場の中に大勢の牛さんや豚さん達が入って来ました。犬のお兄さん達も一緒です。

「さて、今日も食べようか」

「そうだね」

牛さん達はのどかな調子でこんなお話をしていました。

「草をたっぷりとね」

「食べようか」

「わし等の餌は何処かな」

「あそこだよ」

豚さん達は豚さん達で牧場の端の方を見ていました。

「あそこにあるから」

「そう。それじゃああそこに行つてね」

「今日も食べようか」

「そうしよう」

こんなことを話しながらその餌がある方に歩いていきます。牛さん達も豚さん達もそれぞれのどかにそれぞれの御飯を食べながら過ごしています。

その風景を見ながらクワちゃんは。ぽつりと呟きました。

「あれっ、牛さんは草を食べているのに」

まずは牛さんを見ました。見れば牛さん達は牧場の草や用意され

て積み立てている草を食べています。けれど豚さん達はというと。

牧場の端の方に置かれた何か色々に入ったものを食べています。それはクワちゃんから見ると何が何なのか全くわからないものでした。

「あれは何かな」

クワちゃんは豚さん達が食べているものを見ながら首を傾げさせました。

「豚さん達が食べているものって」

「あれっ、アヒル？」

ここで人の声がしました。

「アヒルがいるな」

その声と共にクワちゃんのところはその声が近付いてきました。すると馬に乗った男の子がクワちゃんの側にやって来たのでした。

「クワちゃんじゃないか」

「あれっ、若旦那さん」

クワちゃんもその男の子に気付きました。

「牧場に来ていたんですか」

「何でクワちゃんがここにいるんだらう」

男の子にはクワちゃんという言葉がわかりません。それで一人首を傾げています。

第七章

「どうしてかな」

「ねえクワちゃん」

その男の子のかわりに。彼が今乗っているお馬さんがクワちゃんに優しく声をかけてきました。茶色の身体にとっても優しい目をして
います。

「どうして牧場にいるの？」

「お家の中を見て回っていました」

クワちゃんはお馬さんに対してもとても正直でした。

「それでここにも来たんです」

「そうだったんだ」

お馬さんはクワちゃんの言葉を聞いてまずは頷きました。

「それにしてもよくこんなところまで来たね」

「はい。色々と歩いていまして」

「ううん、お池からここまでね」

お馬さんは皆と同じ様な言葉を出しました。

「やっぱり凄いよ」

「そうなんですか」

「あれっ、クワちゃん」

「こんなところには？」

やがてクワちゃんに気付いて牛さんや豚さんもやって来ました。

牛のお姉さんと豚のお兄さんがやって来たのでした。

「いるんだ」

「またどうして？」

「何でもお家を見回しているそうだよ」

お馬さんがその牛さんや豚さん達に話しました。

「それでここにも来たらしいんだ」

「ふうん、そうだったんだ」

「それでだったんだ」

皆それを聞いてまずは納得した顔で頷きました。

「それでここまで来たんだ」

「よく来たね」

「はい。ところで」

ここでクワちゃんは言いました。

「あの、豚のお兄さん」

「ああ、僕？」

「はい。一つ聞いてもいいですか？」

こう前置きしてからその豚のお兄さんに尋ねるのでした。

「お兄さんが食べていたのは何ですか？」

「僕が今食べていたの？」

「はい。あれは何ですか？」

豚さん達が食べていたものを直接尋ねるのでした。

「何かよくわからないんですけれど」

「ああ、あれは残飯なんだ」

豚のお兄さんにはこりと笑ってクワちゃんに教えてあげました。

「あれはね。残飯なんだよ」

「残飯ですか」

「皆が食べ残したのをね」

こうクワちゃんにお話をするのでした。

「僕が食べるんだよ」

「そうだったんですか」

「そうだよ。そうした皆の残飯を食べて」

お兄さんはさらにお話するのです。

「それで森にある茸を見つけたのが僕達の仕事なんだよ」

「それが豚さんのお仕事なんですか」

「そうだよ。わかってくれた？」

「はい」

お兄さんの言葉にはっきりとした声で頷くのでした。

「そうなんだ。それが僕達の仕事なんだ」

「成程」

「そして私達の仕事は」

今度クワちゃんに言ってきたのは牛のお姉さんでした。お馬さんや豚さん達と同じようにとても温かくて優しい目をクワちゃんに向けています。

「お乳を出すことなのよ」

「お乳!?!」

「皆が飲むね。白いものなのよ」

こうクワちゃんに説明するのですた。

「それがお乳なのよ」

「そのお乳を出すのが牛さん達のお仕事ですか」

「そうよ。それがね」

さらにクワちゃんに教えてあげるのでした。

「私達のお仕事なのよ」

「そうなんですか」

「僕は御主人様や若旦那を乗せるのが仕事だよ」

最後にお馬さんがクワちゃんに言いました。

第八章

「牛さん達と同じように草を食べながらね」

「皆それぞれ別にお仕事があるんですね」

「そうだよ。それでクワちゃんのお仕事はね」

「僕のお仕事は？」

「まず女の子のアヒルさんに卵を産んでもらうようにすること
それだということです。」

「これはここにいるどの生き物も男の子なら同じお仕事だけれどね」
「卵をですか」

「それと朝が来たら鶏さんと一緒に皆に教えてあげることだね」
「それもだというのでした。」

「それがね」
「それがなんですか」

クワちゃんはお馬さんの言葉を聞いてまずはその目を丸くさせました。そうしてそのまま驚く顔でお馬さんに対して言うのでした。

「それが僕のお仕事なんですか」
「わかったかな、それが」

お馬さんはその温かい顔でクワちゃんにまた言いました。
「クワちゃんのことを」

「少しだけ」
「まだ全部はわかりませんでした。それでこう答えたのでした。」

「少しだけわかりました」
「そう。少しだけなんだね」

「はい」
「また答えました。」

「そうです」
「そう。けれど全部わかる時が来るよ」

お馬さんはこうもクワちゃんに言うのでした。

「全部ね。それじゃあこれからは」

「これからは？」

「帰ろうか」

「こうクワちゃんに告げました。

「クワちゃんのお池にね。帰ろうか」

「帰るって？」

「まさかずっとこの牧場にいるの？」

「また温かい目での言葉でした。

「クワちゃんのお家に戻らなくていいの？」

「それは」

「そうだよ。戻らないといけないよね」

「お馬さんが言うのはこのことでした。

「クワちゃんのお家にね。だからね」

「わかりました」

「クワちゃんはまた素直にお馬さんの言葉に頷きました。

「それじゃあ今から帰ります」

「あっ、ちよっと待って」

「柵から飛び降りようとするクワちゃんを呼び止めました。

「待ってよ。いいから」

「どうしたんですか？」

「送るよ。お池まで」

「お馬さんはこうクワちゃんに言うのでした。

「お池までね。送るよ」

「僕のお家までですか」

「クワちゃんにとってはとても遠いけれど僕にとってはすぐそこだしね」

「お馬さんにとってはすぐそこなんですか」

「そうだよ。すぐそこだよ」

「お馬さんはまた言いました。

「僕にとってはね。だから乗りなよ」

「お馬さんに乗るんですか」

クワちゃんはその言葉を聞いて目を丸くさせました。実はクワちゃんはお馬さんに乗ったことがなかったのです。ずっと自分の足で歩か泳いできたのです。

「お馬さんの背中に」

「そうだよ。今は坊ちゃんも仕事でここにはいないし」

「あつ、本当だ」

クワちゃんはこのことにも気付きました。見れば若旦那さんは牛さんや豚さんの世話を犬の皆と一緒にしています。当分こちらには来ないようです。

「何か色々とされてますね」

「だからね。今のうちにね」

「こつもお馬さんでした。」

「お池まで送ってあげるよ」

「いいんですか?」

「いいよ」

クワちゃん言葉ににこりと笑ってみせました。

「それじゃあね。行こうか」

「はい。それじゃあ」

クワちゃんはお馬さんの言葉を受けてその背中に飛び乗りました。まだ小さいのにひらりと飛んでそれで飛び乗ったのでした。

「あれっ、飛べるんだ」

「飛べないですよ」

お馬さんの背中から答えました。

「全然」

「そうだね。これは跳んだっていうのかな」

お馬さんは少し考えてからこつ述べました。

第九章

「今のはね」

「そうですね。跳んだんですよ」

「跳んだんだね。そうか、クワちゃんは跳べるんだ」

温かい声での今のお馬さんの言葉でした。

「跳べるんだね」

「そうですね。僕跳べるんですね」

「じゃあこれから跳ぶといいよ」

お馬さんの温かい言葉が続きます。

「跳び続けてね。生きればいいよ」

「何かよくわからないけれどわかりました」

やっぱりクワちゃんはクワちゃんでした。素直な言葉を出します。

「それじゃあ」

「さて、じゃあ行こうか」

お馬さんは足を進めだしました。

「お池にね」

「はい、それじゃあ」

こうしてクワちゃんはお馬さんに乗せてもらってお池に戻りました。お池に戻ってきたのは本当にすぐでした。クワちゃんはそのことにびっくりしました。

「もうお池が見えてきましたね」

「ほら、言った通りだろ？」

お馬さんは自分の背中にいるクワちゃんに顔を向けて告げました。

「すぐだっただろう？僕だったら」

「はい、本当に」

「馬はね。これが仕事なんだ」

お馬さんはまたクワちゃんに言うのでした。

「誰かをすぐにその場所に運ぶことがね」

「それがお馬さんのお仕事なんですね」

「そうだよ。それが僕のお仕事なんだ」

お馬さんの言葉は続きます。

「わかつてくれたかな」

「はい、わかりました」

今度はよくわかったクワちゃんでした。

「お馬さんのお仕事のこと。よくわかりました」

「わかつてくれたらいいよ。それじゃあ」

「今から降りないといけませんね」

「降りられるかな」

お馬さんはこのことが少し不安になりました。

「僕から。降りられる？」

「はい、降りられます」

けれどクワちゃんは明るい声でこうお馬さんに答えました。

「大丈夫ですよ」

「そうだよね。クワちゃんは跳べるからね」

お馬さんはここでこのことを思い出したのでした。

「だから。大丈夫だよね」

「そうですね。ほら」

ここでクワちゃんは早速跳びました。そうして何なく着地してみせたのでした。

そうして着地してから得意な顔になって。クワちゃんは言うのでした。

「ちゃんとできました」

「よかったよ。あっ」

お馬さんはクワちゃんが無事着地したことに笑顔になっているとここでクワちゃんのお家から。クワちゃんのお父さんにお母さん、それと兄弟達が出て来たのでした。

「皆起きてきたね」

「そうですね」

「そうか。もう朝を伝える時なんだ」

今まさにクワちゃんのお父さんが鳴こうとしています。すぐ近くに
いる鶏さん達もです。

「長いようで短かったかな」

「短かったです」

クワちゃんにしてみればそうでした。

「何か」

「そう。短かったんだ」

「ええ。けれど」

それでもクワちゃんは言うことを付け加えたのでした。

「色々なこと。教えてもらいました」

「そうだね。それはわかるよ」

お馬さんは今はクワちゃんの顔を見ていました。その顔はとても
晴れやかで目もきらきらとしていました。

「よくな」

「僕、これから自分のお仕事します」

その顔で言うクワちゃんでした。

「大きくなって皆から教えてもらったことを忘れないで」

「そうしたらいいよ。じゃあね」

「はい、また」

クワちゃんは笑顔でお馬さんとお別れしました。朝のまだ鶏さん
やクワちゃんのお父さんもまだ鳴いていないうちのお話でした。け
れどそんな短い時間の中でクワちゃんは多くの家族と出会い多くの
ことを勉強したのでした。そんな朝のお話はこれで終わりです。

アヒルの旅 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8774h/>

アヒルの旅

2010年10月8日15時33分発行